



この人の 沖縄力

85

おきなわりよく
いつも前向きで
決して後ろを振り返ることなく、
自由奔放に人生を切り開く、
ウチナーンチュの
ハイタリティーのこと。

食と音楽で やいまを もり立てる

伊良皆 誠さん(石垣島)

文●太田雅子 撮影●嘉納辰彦



島ではゴーヤで止めるんです」
この一言だけでも「やいま」への強い思い入れが感じられる。伊良皆さん、実は元はプロのミュージシャン。従業員7名のうち3名も元々音楽関係者であって、食と音楽を通して「やいま」を盛り立てていこうと奮闘中なのだ。

東京でデビュー

キリスト教会の牧師の家に、4人きょうだいの次男として生まれた。幼い頃は、母が海水で握る塩おにぎりが大好きで、賛美歌と歌謡曲が常に身近にあった。当然、島唄も好きだろうと思つたら、「大っ嫌いでした。両親が忙しくて、4歳の頃に弟のお守りをしながら留守番させられていたときに、ラジオからいつも島唄が流れていて、留守番が寂しい島唄というトラウマがあったんです」

中学、高校の頃は80年代ポップスの全盛期。空前のバンドブームで、文化祭や卒業式といった学校行事に出るためのオーディションまで催される時代だった。

「僕のパバンドは常に1位通過でしたよ。ボーイ・ジョージの真似してメイクしたり……。だけど練習する所がなくて、友人の親の畑の肥料小屋を借りたら、シンバルの上でハブがとぐろを巻いていたり、音がうるさくて隣のブタ小屋の子ブタが死んでしまったと文句を言われたり。ブタが死ぬかあとと思いましたが、すごくデリケートな動物らしいですね」

まさに青春グラフィティといった感じのエピソード満載だ。ちなみにBEGINや大島保克は1年後輩、新良幸人は同級生だという。福岡の九州産業大学経営学部に進学。当時の夢はジャズシンガー。卒業後、2年ほど島でスイカ畑を手伝いながら夜はライブハウスで歌う日々を送った。

1991年、CBS・ソニー主催のボーカルオーディション(応募総数1万2千人)で準グランプリを獲得。プロのボーカリストを目指して東京で暮らし始めた。ところがすぐにはデビューできず悶々として数年を送る。

「頑張つて来いよ」と島から送り出されたからには、そう簡単にはあきらめられないですよ」

アルバイトをしながら400曲ものオリジナル楽曲を作つてディレクターに猛アピール。96年によくやくメジャーデビューし、シン



上・衛生管理が厳密な加工場で長ネギの仕込みをする。右上・「島豚ごろごろ」をはじめとした商品。



BAGADA BANDのボーカルとして、翌日のイベントを前に炎天下でリハーサル。「石垣やいま村」にて。



毎週水曜日にFMいしがきサンサンラジオで生放送番組「ユクイときトリoka time」のDJをつとめている。



妻の恵さん、息子の恵山くん、旭光くん。忙しくても家族で食事する時間を大切にすババだという。

石垣島に、食品会社なのに音楽事業部門をもつユニークな会社があると聞いた。その名も「ゴーヤカンパニー」。

石垣市新川の会社を訪ねると、社長の伊良皆 誠さん(47歳)が迎えてくれた。ラフなポロシャツ姿で、およそ社長らしくない爽やかな笑顔の人だ。

「社名のゴーヤは、ニガウリのやいま(八重山)の言い方です。沖縄本島ではゴーヤとよばれるけど、

グル6枚、アルバム1枚をリリース。連日ストリートライブを敢行し、渋谷で400人集めたことも。「そうした経験は僕の中にスキルとして全部残っているけど、結局僕にはメジャーとして『売れる』音楽が作りきれなかったんです」

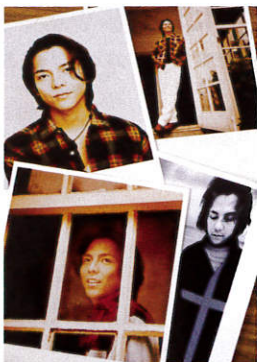
悩んだ末にソニーの所属を辞し、フリーになってサザンオールスターズの桑田佳祐のボーカルサポート(リハーサルで桑田氏の代わりに歌う仕事)や、東京・恵比寿の八重山そばの店「マンタ食堂」の店長をしながら、友人とささやかな音楽活動を続けた。そして父の病気を機に37歳で島に戻った。

食品会社を立ち上げる

「超一流ミュージシャンのメンバーの1人として働いたし、僕はだいたい10年かれば何とかなる男なんだと自分に言い聞かせて」

心機一転、石垣島で「ゴーヤカンパニー」を立ち上げた。同じ年に、東京のアルバイト先で知り合った群馬県出身の恵さんと結婚。それにしてもなぜ食品会社を? 「マンタ食堂で、バジルペーストならぬゴーヤペーストを作つて好評だったんですよ。土産品にしたら売れるんじゃないかと思つたんです。まったく甘かったですね」

なにしろ、土産品ともなると長期間の賞味期限が必要だ。「ものすごく試行錯誤したけど、ゴーヤペーストの商品化は今も未



20代後半、ソニーミュージック時代の宣伝用アーティスト写真。

完成のまま。でも、あきらめず死ぬまででなければいいや、と」

ゴーヤしゃき漬け、ゴーヤ珈琲など、ゴーヤに特化した商品展開をしたものの、農作物が原料の商品は、天候に泣かされることもしばしば。そこで泡盛の製造工程で出るカシジエ(もろみ原液)を使った調味料や、乾燥がきく島唐辛子やピパーツ(島胡椒)など、島の素材をベースにした無添加調味料をつぎつぎに開発。音楽に注いだのと同じ情熱をもって食品会社の仕事に邁進してきた。

「東京で睡眠3時間で頑張るクセがついて以来、睡眠は3時間で大丈夫になってしまったんです。深夜、僕の自由時間に、新しい商品や音楽を構想します」

今年で10周年

会社を始めたころは、エクセルの使い方も、食品衛生法も、事業資金の調達法も知らず、全て手探りで学んできた。

「資金繰りがうまくできず、何度倒産しそうになったことか」

山あり谷ありの経営がようやく

落ち着いたのは、「島豚ごろごろ」を発売した2010年頃から。石垣島の豚肉を使った味噌味の「はんの友」は、今もヒットを続け、「島豚ごろごろ」と社員が合唱するCMソングまである。3年前には「BAGADA BAND」を結成し、第一弾のCDも出した。

「BAGADAとは、やいまの言葉で『私たち』の意味です。子ども頃、大嫌いだつたはずの八重山民謡がベースのコスモポリタンミュージックなんです」

かつて故郷から遠く離れたとき、「やいま」の音楽や味に、計りしれないほど慰められた人は言う。「かまぼこや八重山そばのように島の定番になる食の特産品を作り、島の誰もが口ずさむ歌の特産品を作ること。その目標のために毎日1ミリでも前進していきたい」

健康に一生懸命突き進んで「ゴーヤカンパニー」は今年10周年。それにしても伊良皆さんのエネルギーは、いったいどこから湧いてくるのだろうか?

「島に対する使命感かな。食品と音楽で島の人に喜んでほしい、貢献したい、恩返しをしたい」

翌日、音楽イベントのリハーサル会場で「トやいま、やいま」と熱唱する伊良皆さんの姿があった。照りつける太陽に負けないほど熱いハートの持ち主は、100パーセント「やいま」でできているにちがいない。